現代フランス語の話し言葉における認知動詞 comprendre の用法について

—無標識可能と有標識可能の成立条件に関する考察—

吉武　大輝
東京外国語大学　博士後期課程

ふらんぼー(Flambeau) vol.49 2023, p. 92-111.
原稿受理 2023-11-28；最終版 2024-01-31

抄録
現代フランス語の話し言葉において、認知動詞 comprendre における可能標識 pouvoir の共起は書き言葉の場合と同じ方法で動機づけられている。また、書き言葉と話し言葉の両方において、無標・有標ともに否定の頻度もほぼ同じである。ただし書き言葉と比較すると、無標識の認知動詞 comprendre は談話標識としての使用により現在時制が多い。さらに KH Coder 3 を用いた分析により、認知動詞 comprendre と法動詞 pouvoir の意味論的適合性が高いことが明らかとなった。

Résumé
En français parlé contemporain, la cooccurrence de la marque de potentialité *pouvoir* avec le verbe de cognition *comprendre* est motivée de même façon qu'à l'écrit. Le verbe *comprendre* au présent de l'indicatif employé sans *pouvoir* en tant que marqueur discursif s'observe plus fréquemment à l'oral qu'à l'écrit. En outre, nous avons constaté, en utilisant le logiciel KH Coder 3, que le verbe modal *pouvoir* est fort compatible avec le verbe *comprendre* au point de vue sémantique.

キーワード（認知動詞　可能標識　意味効果）

© ふらんぼー Flambeau 49 (2023)　pp. 92–112.
183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室
183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1 Asahi-cho Fuchu City, Tokyo
本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
https://creativecommons.org/ licenses/by/4.0/deed.ja

はじめに

本稿では現代フランス語の話し言葉において法動詞 pouvoir が認知動詞 comprendre に共起する条件と共起しにくい条件を分析する[1]。comprendre という動詞は「理解」を表す認知動詞であり、動詞に可能標識が共起しない « On ne comprend pas » という形式もあれば、« On ne peut pas comprendre » のように動詞に可能標識が共起する事例もある。先行研究として Yoshitake (2023a) は書き言葉における同様の状況を調査しており、本稿では Yoshitake (2023a) による書き言葉の分析結果と対照しながら話し言葉の状況を分析する。

本研究ではまず、主に Yoshitake (2023a) にて説明される先行研究の内容を再確認する。その後、認知動詞 comprendre における無標識可能・有標識可能の頻度ならびに可能標識の種類、否定の頻度、時制の種類と頻度、KH Coder 3 を利用した特徴的な共起語の分析、有標識可能と無標識可能の成立条件を書き言葉における状況と対照しながら分析する。

1. 先行研究

1. 1. 無標識可能表現とは

第一に無標識可能表現とは、pouvoir や savoir、arriver à inf. といった可能標識を付加せずに「可能」の意を表出することができる表現のことを指す。日本語・中国語・英語における無標識可能表現の対照研究をおこなった石 (2019) や英語・日本語における無標識可能表現の対照研究をおこなった高橋 (2012) による先行研究があり、次の例のように多くの言語でこの現象は観察される[2]。(1) と (2) はフランス語の例であり、(3) と (4) は英語の例である。

(1) a. Je ne vous vois pas.
(私にはあなたが見えない。)
b. Je ne peux pas vous voir.
(私にはあなたが見えない。)

(2) a. Je ne comprends pas.
(私には理解できない。/ 私は理解していない。)
b. Je ne peux pas comprendre.
(私には理解できない。)

(3) a. I don’t see you.

[1] 本研究は JST『科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業』(JPMJFS2110) の助成を受けたものである。

[2] この現象は可能標識を付加せずとも「可能」の意を表すことができることから、第二言語習得に関わる研究分野においても多少話題にされることがある。例えば楠本 (2009) は、日本語の無標識可能表現に対する理解の不足に起因する発話例として、五段動詞「わかる」に助動詞「れる」を付加した「わかれない」という誤用例が存在するということを指摘する。

b. I cannot see you.

(4) a. I don't understand.

b. I cannot understand.

これらの例では、可能標識が共起しない a. の文と pouvoir や can といった可能標識が共起する b. の文は一定の条件の下でほぼ同じ意味であるとみなされる。ただし、全ての動詞が無標識可能表現になりえるわけではない。無標識可能表現の制約として、「知覚」・「認知」・「思考」といった内的情態に関わる動詞であり、なおかつ到達動詞 (verb of accomplishment) や達成動詞 (verb of achievement) といった動作実現のための過程が含意される動詞であることといった条件が課される。

1．2．認知動詞と知覚動詞の差異

上記の (1), (2), (3), (4) の例文では内的情態動詞が使用されているが、非意図的な内的情態を表す動詞とそれ以外の動詞では法動詞 pouvoir の共起の有無によって大きく意味が異なる [3]。例えば、Vendler (1957 : 148) は、可能標識が共起する to be able to run, to be able to write a letter と可能標識が共起しない run, write a letter の間には意味の大きな隔たりがあるという。また同様に、同じ内的情態動詞であっても、意図的な動作 (意志性) を含意する動詞では可能標識の有無によって意味の大きな差異が生じる。

(5) a. D'ici on peut regarder la mer. (Le Querler 1989 : 75)
(ここから海を見ることができる。)

b. D'ici on regarde la mer. (ibid.)
(ここから海を見る。)

(6) a. D'ici on peut écouter la mer. (ibid.)
(ここから海の音を聞くことができる。)

b. D'ici on écoute la mer. (ibid.)
(ここから海の音を聞く。)

Le Querler (1989 : 75) は (5) と (6) の例について、それぞれ a. と b. は大きく異なる意味であるとし、« L'équivalence est moins facilement envisageable avec les verbes qui indiquent une perception où le sujet met en œuvre sa volonté » (「自分の意志を実行する主語をもつ知覚動詞では等価性が低下する」) と主張する。

一方で、非意図的な内的情態を表す動詞では有標と無標の間で大きな意味的差異は観察されない。例えば、Vendler (1957 : 148) は to be able to know, to be able to see, to be able to spot the plane の意味はそれぞれ know, see, spot the plane という無標の形

[3] 内的情態動詞とは有情物の内面に関する感情を表す動詞のことであり、日本語学における工藤 (1995) の研究がよく知られる。工藤 (1995) は日本語学におけるこの型の動詞について、テンス・アスペクトにおける振る舞いの特殊性について論じる。

式とほぼ同じものであるという。また Le Querler (1989 : 70) は以下の例を用いて、フランス語においても一定の条件の下で非意図的内的情態動詞では有標識可能と無標識可能の間で大きな意味的差異は観察されないという。

(7) a. D'ici on peut voir la mer. (Le Querler 1989 : 70)
(ここから海が見える。)
b. D'ici on voit la mer. (ibid.)
(ここから海が見える。)

ただしここで、同じ内的情態動詞であってもそれぞれの動詞のアスペクトの違いが問題となる。(1), (3), (7) の例文では動詞 voir と see が使用されており、これは「知覚」を表す動詞である。他方、(2), (4) の例文では動詞 comprendre と understand が使用されており、(1), (3), (7) が表す「対象の知覚 (perception)」のみをプロファイルしているだけではなく、その外部刺激である知覚対象を「識別化 (identify)」「内面化 (internalize)」する行為が含意されている。すなわち、comprendre や understand といった動詞は、感覚器官による「知覚」を問題とする知覚動詞とは異なり、脳内にて行われる「認知」・「思考」を表象する動詞である。この点において、comprendre や understand といった動詞は認知動詞であると言える。

「知覚」と「認知」は内的情態に関わるものであるため、多くの先行研究でしばしば混同されることがある。次の表 1 は Vendler (1957) による動詞アスペクトの四分類であるが、そこにおいても「知覚」と「認知」は同一のものであるとみなされる。Vendler (1957 : 154-155) は "There is no question that seeing can be an achievement in our sense. Uses like 'At that moment I saw him,' together with the above-mentioned possibility of saying 'I have seen it' as soon as one is able to say 'I see it,' show that much." と主張しており、英語の知覚動詞 see は recognize や find といった他の認知動詞と同様に、以下の表 1 でいうところの到達動詞に属すという。

表 1. Vendler (1957) による動詞アスペクトの四分類

① 状態 (states)	Eg.) have, desire
② 活動 (activities)	Eg.) run, walk
③ 到達 (achievement)	Eg.) recognize, find
④ 達成 (accomplishment)	Eg.) paint a picture, make a chair

ただし上述したように、知覚動詞は瞬間的に終点を表す典型的な到達動詞であるのに対して、認知動詞は到達動詞でありながら目標へ向けた行為 (acte) がなされていることもまたよく表しうると考えられる。この点において知覚動詞と認知動詞は一線を画すと言える。

1．3．法動詞 pouvoir の用法

典型的な可能標識である法動詞 pouvoir には根源的用法と認識的用法が存在する。前者は主体の能力を表象し、後者は認知レベルで根源的用法から派生したものである [4]。このうち、本稿にて問題としている無標識可能表現と有標識可能表現の対立については、認識的用法の pouvoir も関わる可能性はあるが、多くの場合根源的用法の法動詞 pouvoir が関わることになると思われる。

この根源的用法の法動詞 pouvoir について、Fuchs & Guimier (1989 : 6-7) は « […] le modal apparaît dans une phrase conclusive au terme d'un développement qui vise à décrire les conditions nécessaires à la réalisation de ce procès […] le procès est réalisé, mais pouvoir est le signe d'une remontée dans l'avant du procès, dans le champ de ses conditions de réalisation. » (「法動詞 pouvoir によるモダリティは、事行達成の必要条件を叙述することを目的としたプロセス終点の結論文に現れる。そして、ここではプロセスは達成されているが、その達成に必要な条件の場におけるプロセス達成以前の遡行のしるしこそが法動詞 pouvoir である。」) と主張し、さらに法動詞 pouvoir が選択する値として下記の図 1 が示すように « deux pôles entre lesquels toutes les valeurs contextuelles de pouvoir trouvent place, depuis la possibilité à l'état pur (équilibre entre chances de réalisation et chances de non-réalisation) jusqu'à l'actualisation » (「純粋な状態の可能性 (実現可能性-実現不可能性の均衡) から実現された状況にかけて動的に構成される二つの対極的概念」) の存在を言及する。以下の図では avant と示された主軸の左側が純粋な状態の可能性を表象しており、après と示された主軸の右側が実現状況を表象している。

---

[4] Le Querler (2001 : 25-26) は根源的用法 (la modalité de l'*être*) について « la possibilité est interne à la relation prédicative » (「行為の可能性は主述関係の内に存在する」) と説明し、認識的用法 (la modalité du *faire*) については « la possibilité porte, de l'extérieur, sur la relation sujet-verbe » (「行為の可能性はテクストの外部 (認知主体) より主述関係に関わっていく」) と説明する。例えば、« Je lui ai donné tous les éléments dont il avait besoin, il peut sans problème remplir le dossier tout seul. » (Le Querler 2001 : 25) における法動詞 pouvoir は根源的用法であり、« Ils peuvent être tout à fait charmants. » (Le Querler 2001 : 26) における法動詞 pouvoir は認識的用法である。

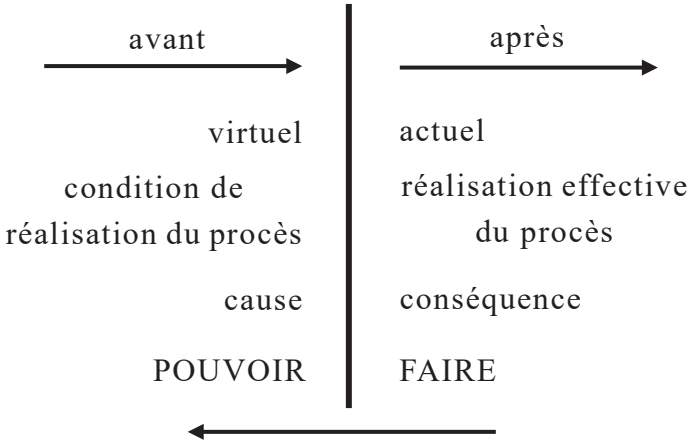

図 1. 法動詞 pouvoir の機能モード (Fuchs & Guimier 1989 : 6)

以上の Fuchs & Guimier (1989 : 6-7) が説明する法動詞 pouvoir の特性上、次の (8) の例のように法動詞 pouvoir を付加することでテクストに意味効果 (effet de sens) が表出されることがある。

(8) a. Jean a pu partir pour Dax. (Boissel & Devarrieux 1989 : 61)
b. Jean est parti pour Dax. (ibid.)

この例について Boissel & Devarrieux (1989 : 61) は « La suppression du modal ne rend pas la phrase inacceptable, mais le sens est lourdement appauvri. Ce qu'exprime le modal, aux formes de l'accompli, dans l'interprétation PR[5], avec, éventuellement des circonstants qui soulignent la difficulté, c'est le résultat d'un processus, l'aboutissement d'une démarche, voire l'accomplissement d'une prouesse » (「法動詞 pouvoir によって表されるモダリティが無いからといってテクストが容認不可能になるわけではないが、テクストの意味はたいへん乏しくなる。場合によっては困難性が強調された状況で、事行実現の解釈において完了形におけるモダリティが表すものは、事行のプロセスの結果や事行の成果であったり、さらには困難なことを達成できたことであったりする。」) と説明する。

よって、(8a) の例文で表される困難性 (difficulté) は意味効果としてみなすことができる。Kerbrat-Orecchioni (2015) によれば、意味効果の解釈は意味論的語用論的な価値に依拠するところがあるとしたうえで、« Toutes ces valeurs sont d'une certaine manière inscrites dans l'énoncé, mais sur la base d'indices plus ou moins clairs ou ténus, dont l'actualisation repose donc plus ou moins sur des informations contextuelles. » (「これらの効果は何らかの形で発話に加えられているが、多かれ少なかれ明瞭ないしは微細な兆候に基づき、その実現は文脈による情報に多少なりとも基づく。」) という。

[5] PR は « procès réalisé » (「実現された事行 (プロセス)」) を意味する。

２．研究目的と分析方法

２．１．研究目的

以上の先行研究より、「認知」とは対象を「知覚 (perceive)」「識別化 (identify)」し、「内面化 (internalize)」する営みであるとみなすことができ、知覚動詞と比較した場合の認知動詞 comprendre について次の仮説を立てることができる。

(9) 認知動詞 comprendre は到達動詞であり、それが表象する「理解」という行為は労力や努力が付随する行為である。そのため、目標へ向けた行為 (acte) がなされることもよく表し、可能標識と共起しやすい。

続いて、本稿の研究目的は、現代フランス語の動詞 comprendre (「理解する」) において可能標識が共起しやすい条件 (有標識可能表現) と可能標識が共起しにくい条件 (無標識可能表現) を調査することにある。書き言葉における同様の研究は Yoshitake (2023a) がおこなっており、本稿では話し言葉における状況を Yoshitake (2023a) と比較して記述する。

２．２．分析方法

分析のために ORFÉO (Outils et Recherches sur le Français Écrit et Oral) をデータベースとして用いる。なお、このデータベースは現代フランス語の多様なジャンルの書き言葉と話し言葉のコーパスを収録しているものである。分析では ORFÉO 上で調査可能なすべてのコーパスを使用した。

分析対象の言語表現については、可能標識が共起していない動詞 comprendre の用例と可能標識が共起している動詞 comprendre の用例を観察する。なお、ここで言う可能標識とは法動詞 pouvoir や capable de だけでなく、en état de, en mesure de, arriver à, réussir à, peiner à, avoir du mal à といった表現もその範疇に入る。これらの表現の原義 (表意) は「可能」ではないが、原義から派生した意味 (非表意) として「可能」を表すため、主な可能標識以外のこれらの表現を本稿では準可能標識と称す。また、これら認知動詞 comprendre と可能標識の他に特徴的な共起語も併せて分析する。

データの規模および扱い方については、第一に、ORFÉO は書き言葉と話し言葉の両方のデータを収録したコーパスであるため、本稿では話し言葉のデータのみを選択したうえで全ての活用形の動詞 comprendre の用例を抽出する。第二に、このデータから « contenir » (「含む」) の意味として使われている用例を除く。最後に、Yoshitake (2023a) における書き言葉分析の統語的条件と揃えるために、以下の文法事項を有する動詞 comprendre の用例を排除する。

(1) 命令形の動詞 comprendre
(2) 使役形の動詞 comprendre

(3) ジェロンディフ形ならびに分詞構文として機能している動詞 comprendre
(4) 動詞 comprendre を不定詞形にさせるもの
(※ être capable de や arriver à といった可能標識を除く)
(eg. 前置詞, devoir, vouloir, faire, aller, croire, …)
(5) [S (主語) (+ pouvoir) + comprendre)] の形 (Phrase finie) を取らないもの
(eg. 名詞を修飾する capable de, il est impossible de, …)

3. 分析結果と考察

3. 1. 概要（無標識可能表現と有標識可能表現の頻度・可能標識の種類）

無標識可能および有標識可能の頻度、ならびに可能標識の種類を示したものが以下の表 2 である。可能標識の種類については分析において見受けられたもののみを記述している。なお、各主可能標識・準可能標識の割合は、有標の総数 (112) を母数とした時の割合であり、百分率の小数点第 3 位を四捨五入した。

表 2. 認知動詞 comprendre における無標識可能および有標識可能の頻度ならびに可能標識の種類

無標 :	1513 (93.11%)			
有標 :	112 (6.89%)			
	主可能標識		準可能標識	
	pouvoir :	65 (58.04%)	arriver à :	27 (24.11%)
	savoir :	2 (1.79%)	avoir mal à :	9 (8.04%)
	être capable de :	1 (0.89%)	avoir de la difficulté à :	3 (2.68%)
	être incapable de :	1 (0.89%)	peiner à (avoir de la peine à) :	2 (1.79%)
			parvenir à :	1 (0.89%)
			être apte à :	1 (0.89%)
合計 :	1625 (100.00%)			

この結果を Yoshitake (2023a : 25) と対照すると、書き言葉での無標識可能表現の頻度は Yoshitake (2023a : 25) では 94.00%だったのに対して、今回の話し言葉での調査では 93.11%であった。また、書き言葉での法動詞 pouvoir の共起事例は 6.00%であったのに対して、今回の話し言葉での調査では 4.00%であった。このことから、話し言葉における無標識可能・有標識可能の状況と書き言葉における無標識可能・有標識可能の状況はほぼ同じものであると結論付けることができる。

また、吉武 (2022) によれば、書き言葉における主可能標識の頻度は法動詞 pouvoir が最も高く、主可能標識全体のうち約 70%を占める。その次に出現頻度が高いものは savoir, être capable de, être en état de, être en mesure de であり、この事実も表 2 にて示した話し言葉における状況とほぼ一致する。

そして、書き言葉における準可能標識の頻度についても、吉武 (2022) によれば、arriver à の頻度が最も高く、その次に出現頻度が高いものは parvenir à, réussir à,

peiner à (avoir de la peine à), avoir mal à, être apte à であり、このことも表 2 に示した話し言葉における状況とほぼ一致する。

３．２．否定の頻度

次に無標識可能、有標識可能それぞれの場合の否定の頻度を示したものが以下の表 3 である。「可能」を扱う際、言語の種類に関わらず「否定」が何かと話題にされやすいということは確かである。例えば、Yoshitake (2023b) は、フランス語の動詞 arriver の可能用法 ([N_1 arrive à inf.]) は、「困難性」の意味効果を保有しており現代フランス語において否定の頻度が顕著であると主張する。また、日本語の現象ではあるが、古代日本語の「可能」を表す助動詞「る」「らる」は否定形で頻出したと言われている (cf. 吉田 2019 : 9-12, 川村 2012, etc)。このように言語において「可能」と「否定」には緊密な関係があるが、この状況を踏まえて話し言葉の認知動詞 comprendre の有標識可能における否定頻度の状況をここでは分析する。

次の表 3 が認知動詞 comprendre における否定の頻度を表す。今回の分析では否定語には (ne …) pas だけでなく、ne … que や peu、à peine といった否定表現をも含む。ただし、être incapable de や avoir mal à、avoir de la difficulté à、peiner à (avoir de la peine à) といった根源的に否定の意をもつ表現の否定頻度は分析対象としない。なお、(　) 内の数値は、表 2 における各々の数値を母数とした時の割合であり、百分率の小数点第 3 位を四捨五入した。

表 3. 認知動詞 comprendre における否定の頻度

無標 :	586 (38.73%)			
有標 :	29 (29.90%)			
	主可能標識		準可能標識	
	pouvoir :	13 (20.00%)	arriver à :	15 (55.56%)
	savoir :	0 (0.00%)	parvenir à :	0 (0.00%)
	être capable de :	0 (0.00%)	être apte à :	1 (100.00%)
合計 :	615 (37.85%)			

表 3 によれば、無標の動詞 comprendre に否定語が共起する頻度は 38.73%であり、法動詞 pouvoir によって有標化している動詞 comprendre に否定語が共起する頻度は 20.00%である。Yoshitake (2023a : 25) によれば、書き言葉における否定頻度の状況は、無標識可能で 33.92%であり、法動詞 pouvoir が共起する事例では 41.13%であるという。そのため、話し言葉と書き言葉において、無標識可能・有標識可能ともに特段に否定頻度が高いわけではないということが言える。

３．３．時制

続いて、無標識可能の場合の認知動詞 comprendre の時制と有標識可能の場合の法動詞 pouvoir の時制について書き言葉と話し言葉における状況の違いを分析する。これは、Andersen (2007) が « Le verbe *comprendre* peut apparaître dans une proposition parenthétique à la deuxième personne du présent de l'indicatif, à la forme affirmative » (「動詞 comprendre は挿入句として二人称直説法現在形の肯定形で出現することがある。」) と主張するように、話し言葉において現在形をとる談話標識としての動詞 comprendre が出現しやすいと予測されるためである [6]。

本研究の話し言葉の分析では、無標識可能では過去時制が 548 例 (36.23%)、現在時制が 936 例 (61.86%) であり、法動詞 pouvoir による有標識可能の例では過去時制が 4 例 (6.15%)、現在時制が 61 例 (93.85%) であった。

他方、吉武 (2022) による書き言葉の分析では、無標識可能では 1943 例中、過去時制が 903 例 (46.47%)、現在時制が 946 例 (48.69%) であり、法動詞 pouvoir による有標識可能の例では 124 例中、過去時制が 34 例 (27.42%)、現在時制が 85 例 (68.55%) であった。

これらのことから、書き言葉・話し言葉の両方で無標識可能・有標識可能ともに現在時制が過去時制を上回っており、書き言葉では過去時制と現在時制の頻度には話し言葉ほどの大きな差は見られない一方で、話し言葉では、過去時制と現在時制の頻度には大きな差が見られるということがわかる。これは、話し言葉において談話標識が多く使用される傾向にあるためであると考えられる。

３．４．特徴的な共起語

続いてコーパス内で見られた認知動詞 comprendre における特徴的な共起語について説明する。

第一に、共起の有意性について客観的に判断するために、本研究では KH Coder 3 と呼ばれる計量テキスト分析・テキストマイニングのためのソフトウェアを用いた。バックエンドとして形態素解析では FreeLing を使用した。今回は 2.2.にて言及した « contenir » (「含む」) の意味として使われている用例を除いたコーパスデータ (第二段階の排除規則を適用したデータ) を KH Coder 3 で使用した。各用例の文脈の長さは動詞 comprendre を基準として前後それぞれ 20 単語であり、全ての活用形の動詞 comprendre を強制抽出語として指定したのち、コーパスの中から自動的に語を取り出し

---

[6] 例えば國末 (2020 : 160-161) は動詞 comprendre の構文と意味の関係性を説明するにあたって、« donc si l'essentiel c'est d'être dans le pays tu *comprends* euh parce qu'évidemment quand tu quand tu fais un trajet si tu devais faire Marseille Madrid bon ça te fait augmenter les prix » (「つまり、もし、重要なのは、その国にいるってことならね、だって、もしマルセイユからマドリッドに行かなければならなかったら旅費が高くなるでしょ」) (fr16_2005_07_05) といった挿入句に現れる例を提示する。このような例について國末 (2020 : 161) は「相手に対して「分かる?」、「~ね」と同意を求める表現として用いられる」と主張する。

て分析の準備をする前処理を実行した。その結果、本コーパスにて出現した語彙として以下の表 4 が得られた。

表 4. KH Coder 3 による抽出語リスト

#	抽出語	品詞/活用	頻度
⊞ 1	être	V	3246
⊞ 2	avoir	V	2470
3	pas	R	1863
4	euh	I	1570
5	c	R	1132
6	oui	R	1038
⊞ 7	ç	N	877
⊞ 8	faire	V	773
⊞ 9	dire	V	772
10	comprends	TAG	693
11	ouais	I	647
⊞ 12	non	R	593
13	j	N	573
14	comprendre	TAG	561
15	compris	TAG	541
16	bien	R	522
⊞ 17	aller	V	450
⊞ 18	l	N	416
⊞ 19	pouvoir	V	404
20	parce	N	378
⊞ 21	parler	V	370
22	hein	I	368
⊞ 23	plus	R	355
24	ah	I	349
25	qu	N	348
26	là	R	332
27	ben	I	326
28	alors	R	322
⊞ 29	bon	AQ	322
30	comprend	TAG	315
⊞ 31	voir	V	314
32	enfin	R	300
⊞ 33	savoir	V	285
34	ne	R	284
⊞ 35	vouloir	V	274
36	d	AQ	251
37	hum	N	249
38	qu	V	242
39	qu	R	238
40	que	R	221
41	peu	R	217
⊞ 42	m	N	215
43	l	AQ	213
44	voilà	I	207
⊞ 45	n	N	200
46	j	R	199
47	même	R	197
⊞ 48	d	N	188
49	aussi	R	186
⊞ 50	chose	N	180
51	très	R	177
⊞ 52	millimètre	N	171
⊞ 53	j	V	159
⊞ 54	faillir	V	155
⊞ 55	s	N	154
56	gens	N	150
57	si	R	136
58	vraiment	R	135
59	nnaammee	N	133
60	tout	R	132
⊞ 61	petit	AQ	131
62	fois	N	127
⊞ 63	mot	N	127
⊞ 64	arriver	V	122
⊞ 65	même	AQ	122
⊞ 66	autre	AQ	118
⊞ 67	penser	V	118
⊞ 68	suivre	V	117
69	comprenez	TAG	116
⊞ 70	croire	V	110
71	deux	N	108
72	comprenais	TAG	107
⊞ 73	truc	N	104
74	beaucoup	R	102
75	comprennent	TAG	102
⊞ 76	passer	V	98
77	toujours	R	97
⊞ 78	devoir	V	95
⊞ 79	mettre	V	93
⊞ 80	sûr	AQ	90
⊞ 81	coup	N	89
82	accord	N	88
⊞ 83	français	N	86
84	peut-être	R	86
85	déjà	R	85
⊞ 86	oh	I	84
⊞ 87	accent	N	83
⊞ 88	essayer	V	83
89	fait	N	82
90	l	R	80
91	trop	R	80
92	mieux	R	79
93	temps	N	78
⊞ 94	prendre	V	76
⊞ 95	aimer	V	74
⊞ 96	exemple	N	72
97	donc	R	68
⊞ 98	donner	V	68
⊞ 99	trouver	V	67
⊞ 100	venir	V	67

これらの抽出語のうち注目に値する語彙は第 19 位に出現する法動詞 pouvoir と第 33 位に出現する動詞 savoir であり、これにより「無標識可能」と「有標識可能」の間に競合関係が垣間見える。そして認知動詞 comprendre が到達動詞であるということを如実に示す語彙として、第 64 位に出現する動詞 arriver と第 88 位に出現する動詞 essayer がある。この他にも以下の例のように chercher à comprendre や mettre longtemps à comprendre という表現もコーパスでは観察される。

(10) [...] en fait il se cachait de sa maladie ce qui l'entraînait à faire des fautes qui étaient néfastes pour son diabète donc j'ai cherché un petit peu à *comprendre* au niveau de la famille ce qu'il se passait

([CRFP > PRI-AMI-2])

(実際彼は病気を秘密にしていて、それによって彼が糖尿病に悪影響を及ぼすようなことをしてしまいました。だから私は何が起こっていたのかを家庭レベルでちょっとだけ理解しようとしました。)

(11) […] je lui avais dit que j'avais adoré son chou-fleur la dernière fois et là un jour j'étais j'étais dans la chambre avec mon l'ordinateur et puis là snif je commence à tendre le nez tu vois sentir quelques chose qui m'évoque quelques chose que j'aime beaucoup tu vois et là et là en fait parce que j'<u>ai mis longtemps à *comprendre*</u> que c'était ça et […]

([TUFS – Center of Usage-based Linguistic Informatics > 03_MW_CD_100222])

([…] この間私は、カリフラワーが大好きだと彼に伝えて、ある日、コンピューターのある部屋にいたのですが、私は鼻を伸ばして、大好きなものを思い出させる匂いを感じました。それがカリフラワーの匂いであるということがわかるのに時間がかかったので、[…])

なお、動詞 comprendre における特徴的な修飾表現については Charest et al. (2012) による *Le Grand Druide des cooccurrences* という共起語辞典に表 5 のように掲載されている。*Le Grand Druide des cooccurrences* と今回の KH Coder 3 による抽出語リストを比較すると bien (第 16 位) や mieux (第 92 位) という修飾語が共通して存在することがわかる。

表 5. 認知動詞 comprendre の修飾語一覧 (cf. *Le Grand Druide des cooccurrences*)

bien ~	~ de travers	~ difficilement
~ mal	~ facilement	~ de moins en moins
~ parfaitement	~ sans peine	ne pas ~ visiblement
~ aisément	~ de mieux en mieux	~ sans difficulté
~ tout à fait	~ du premier coup	~ exactement
~ vite	~ en profondeur	~ vaguement
~ tout de suite	~ intuitivement	~ instinctivement
~ à demi-mot	ne pas ~ franchement	ne pas ~ en vérité
		~ d'instinct

第二に、同じく上記の前処理を施したデータを使用して KH Coder 3 で共起ネットワークを分析した。語の取捨選択については最小出現数を 400 に設定し、描画する共起関係の対象を上位 60 語に限定した。なお、共起性の尺度については Jaccard 係数を使用した。以下の図 2 はそのフィルター設定を基に出力した共起ネットワーク図である。

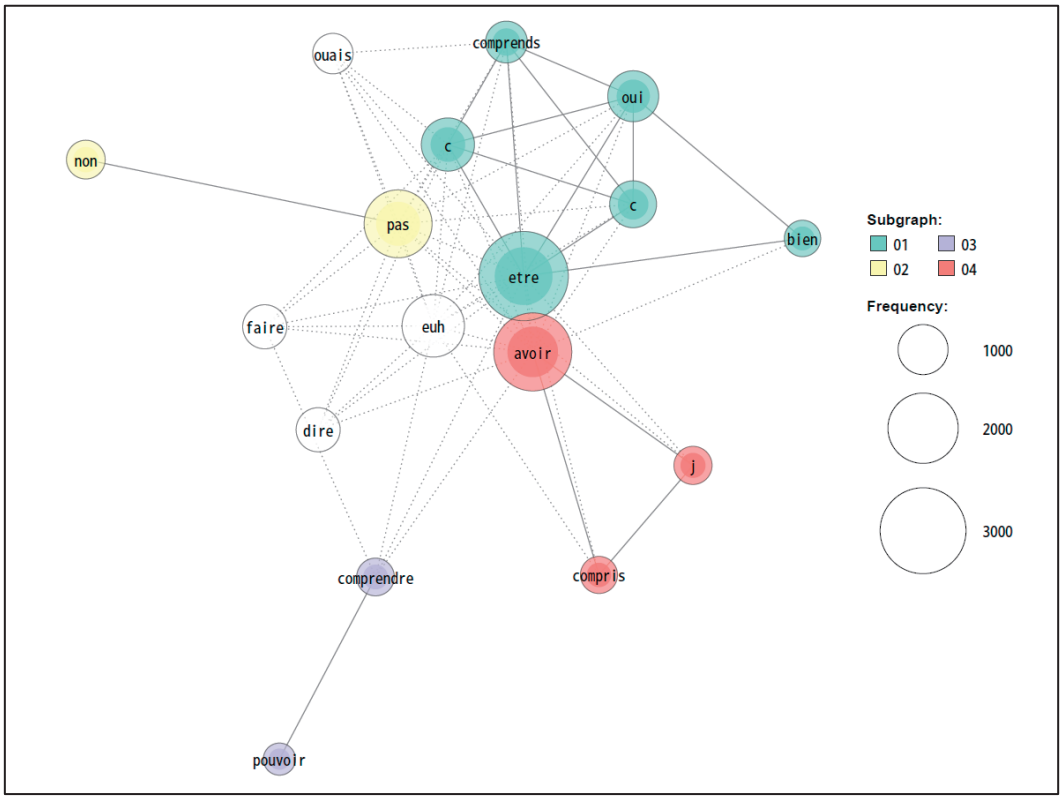

図 2. 認知動詞 comprendre を取り巻く共起ネットワーク

この図では、線による結合の有無で語の関係性を示し、線が太い場合は強固に結びついているということを表す。また円が大きい語ほど出現頻度が高いものである。ここで注目に値する事象は、認知動詞 comprendre が不定詞形で出現する場合、その多くは法動詞 pouvoir が共起するということである。この事実は認知動詞 comprendre が法動詞 pouvoir と強く共起しうる関係にあるという証左である。

3．5．有標識可能表現の文脈傾向

次に本研究の目的の一つである法動詞 pouvoir の共起条件について考察を行う。Yoshitake (2023a) によれば、少なくとも書き言葉において「困難性」「怒気」「譲歩」が表出される文脈や可能主体の対比が行われる文脈、さらには修辞疑問文で認知動詞 comprendre に法動詞 pouvoir が共起しやすいという。本研究の話し言葉における状況の分析結果もおおむね書き言葉における状況と一致するように思われる。

例えば次の例では、「容易性」を表す文脈において法動詞 pouvoir が共起している。

(12) c’est comme une œuvre d’art les gens qui n’apprécient pas l’art contemporain par exemple euh ben euh ils on <u>peut</u> *comprendre* certaines choses et puis on effectivement il y a aussi un peu de peut-être de facilité dans certaines œuvres mais malgré tout

([CRFP > PRI-BEL-1])

([…] それは芸術作品のようなものです。例えば現代美術がわからない人でも一定のことは理解できますし、実際にはおそらく簡単な内容の作品もあります。けどいずれにしても […])

この例では、« il y a aussi un peu de facilité dans certaines œuvres »(「簡単な内容の作品の存在」)を前提にしたうえで、« les gens qui n'apprécient pas l'art contemporain »(「現代芸術に造詣がない人」)でさえ理解できるということを意味する。

次の例は「容易性」とは真逆の「困難性」を表出する文脈をもつ。

(13) quoi oui mais enfin c'est compliqué c'est compliqué je je je <u>peux</u> *comprendre* euh ce qu'elle ressent et pourquoi elle ne vient pas après bien sûr ce n'est pas ce que je désire

([TUFS – Center of Usage-based Linguistic Informatics > Dasilva_Richard_confidences_sur_canape])

(そうだね、けれどとにかく複雑です。彼女が何を思っていて、どうしてその後来ないのかは理解できますけど、それは私が望んでいることではありません。)

この例では « c'est compliqué, c'est compliqué »(「状況がとにかく複雑である」)という状況ではあるが « je peux comprendre »(「とりあえず理解することはできる」)ということが表されている。さきの (12) の例は「容易性」を表したが、この (13) の例では「理解」を阻みうる「困難な状況」が示唆されている。「容易性」と「困難性」は段階的な指標 (Valeur scalaire) であるため、(12) と (13) における法動詞 pouvoir の共起は同じ方法で動機づけられていると言える。

続いての例は修辞疑問の例である。

(14) […] mais comment <u>peuvent</u>-ils *comprendre* le texte ils comprennent pas le sens des mots

([CRFP > PRI-AUX-1])

(けど、どうやったら彼らが文章を理解できるのか ? 実際、彼らは単語の意味を理解していない。)

この文脈では、発話者は « ils comprennent pas le sens des mots »(「彼らは単語の意味を理解していない」)という事実を知りつつも « comment <u>peuvent</u>-ils *comprendre* le texte »(「どうやったら彼らが文章を理解できるのか ?」)と対話者に答えを求めない質問をしている。修辞疑問文は通常それ自体が発話者の発話の「強調」を表すため、法動詞 pouvoir が頻繁に共起すると考えられる。

次の例は「譲歩」ないしはそれに近い意味を表出する文脈をもつ。

(15) je ne pense pas qu'il y ait qu'ils lisent d'autres publications en en patois enfin moi je pff je pff je le ressens uniquement euh comme un plaisir pour euh pour ces le~ p~ ces lecteurs mais moi ça ne me ça me laisse indifférente ça ne me dérange pas euh je peux le je peux le *comprendre* mais euh je ne me sens pas impliquée du

([Valibel > ileBC1r])

(彼らがパトワで書かれた他の出版物を読むとは私は思いませんし、読者からしてみれば私は楽しみとしか感じませんけど、私は相変わらず無関心ですし、逆に気持ちが乱れるわけでもありません。理解はできますが、私が関わっているような感覚はありません。)

この例では、« je peux le comprendre » (「理解することはできる」) のであれば、« je me sens impliquée » (「関わっているような感覚になる」) のが当然の帰結であることに反して、発話者は « je ne me sens pas impliquée » (「関わっているような感覚はない」) という真逆の状態を主張している点において「譲歩」のニュアンスが出されていると言える。

続いての文脈では「理解」という行為を実行できる人物とそうでない人物が対比されている。すなわち可能主体の対比が行われている。

(16) oui oui ce sont des mots comme nous autres [...] un petit mot comme ça pour pour faire comprendre mais que les autres ne peuvent pas *comprendre* hein voyez ça était comme ça alors hein

([Valibel > marDL1r])

(はい、はい、それは私たちが使うような言葉です。自分以外の人に理解させるためのひと言だけど、他人には理解できないような言葉かな。)

この文脈では、パトワ (patois) に関する会話が行われており、「自分を含めた独特な表現を知る者」と « les autres » (「それ以外の他者」) における「理解」の可否の差について説明している。

続いての文脈では「理解」が可能となる条件について仄めかされている。

(17) pourquoi quand un train est en retard ou qu'il est un panne on dit pas aux gens ce qui se passe les gens peuvent *comprendre* ils sont pas cons

([CFPB (French as Spoken in Brussels) > CFPB-1000-5])

(どうして電車が遅延していたり故障していたりした時に「何が起こっているのか」と尋ねないのか。人々は理解できるし、バカではない。)

この例では、発話者は « les gens sont pas cons » (「人々はバカではない」) という条件・理由の存在を明示し、« ils peuvent comprendre » (「理解することができる」) ということを主張している。

この「可能条件」の明示による法動詞 pouvoir の共起については、次の例のほうがより鮮明に「可能条件」が際立っているように思われる。

(18) c'est ça s'individualiser et comprendre l'autre et on ne peut *comprendre* l'autre que en ayant une nourriture de grands écrivains pour devenir sensible
([Valibel > irtLF1s])
(それは自分自身を個別化し他者を理解することであり、偉大な作家の養いを受けて敏感になることによってしか他者を理解することができない。)

この発話では、« on peut comprendre l'autre » (「他者の理解」) が可能となる条件が否定辞 ne … que によって制限されており、「理解」が可能となる条件を際立たせているといえる。

3．6．無標識可能表現の文脈傾向

続いて、法動詞 pouvoir が共起しづらい条件について分析する。Yoshitake (2023a) によれば、書き言葉では tout de suite や à demi-mot といった「瞬時性」を表す副詞的表現が共起する場合は認知動詞 comprendre に法動詞 pouvoir が共起しにくくなるという。本研究では話し言葉においても同様に、「瞬時性」を表す時間副詞が共起する場合は法動詞 pouvoir が共起しない傾向にあることがわかった。具体的には、以下の例のように vite や tout de suite、tout à l'heure、immédiatement、[en + 時間表現] といった表現が共起していた。

(19) d'ailleurs le dentiste a essayé de de de m'empêcher de venir ce soir mais il a pas complètement réussi et alors euh évidemment euh vous qui êtes avertis vous *avez* tout de suite *compris* que que c'est vrai
([FRENCH ORAL NARRATIVE > De_La_Salle_GRAND-MERE_MENSONGE_1])
(それに、歯医者は今晩私が来られないようにしようしたけど、完全にはうまくいかなかったので、当然のことながらそれを知らされたあなたは本当のことだとすぐに理解しました。)

(20) oui en fait ça nous a plus tétanisés en fait on restés figés à regarder euh on savait bien on *a* bien *compris* en quelques secondes quels profils ils recherchaient
([CFPP2000 > Paul_Simo_20_Pierre_Marie-Simo_M_34_18e])
(実際私たちはじっとしたまま見ていました。彼らが誰を探しているのか数秒で理解しました。)

(19) の発話は tout de suite (「すぐに」) という表現が共起している事例であり、(20) の発話は en quelques secondes (「数秒で」) という副詞的表現が共起している事例

である。

３．７．有標識可能表現の文脈と同じ状況にある無標識可能表現

最後に、「困難性」が表出されたり可能行為の対比が行われたりしている文脈であるにも関わらず認知動詞 comprendre に法動詞 pouvoir が共起しない事例を観察する。

(21) était éveillée qui était éveillée euh depuis quelques mois elle parle pas mais par contre elle *comprend* tout ce que tu lui dis hein elle commence à savoir
([TCOF > Ergotherapie_sch])
(彼女は 2-3 か月前から意識を取り戻しており、会話はしないけれどもあなたが言うことは理解しています。)

この例では頭部外傷による後遺症について会話が行われており、« elle parle pas » (「話せない」) という「不可能な行為」と « elle *comprend* tout ce que tu lui dis » (「あなたが言うことは理解できる」) という「可能な行為」が対比されているが、法動詞 pouvoir は共起していない。

次の例は「譲歩」ないしはそれに近い意味を表出する文脈をもつ。

(22) Eleanore *comprend* la guerre mais en déteste les horreurs
([C-Oral-Rom > fmedrp03])
(エレアノールは戦争を理解しているが、その恐ろしさには我慢ができない。)

この例では、« comprendre la guerre » (「戦争の理解」) と « détester les horreurs de la guerre » (「戦争による恐怖を嫌うこと」) が対比されており、« Eleanore <u>peut</u> *comprend* la guerre mais en déteste les horreurs » のように認知動詞 comprendre に法動詞 pouvoir を付加しても文法的に問題はないが、実際は法動詞 pouvoir は共起していない。

次の例文は「理解」という行為を実行できる人物とそうでない人物が対比されている発話である。

(23) on nous apportait le le café le matin ou des choses de ce genre n'est-ce pas et alors je me souviens très bien que ces gens arrivaient en camionnette et alors nous étions autour d'eux ils parlaient les premières fois et j'avais à côté de moi la madame *Lierond* qui est une Parisienne et qui est très cultivée disait j'y comprends rien elle *comprenait* pas un mot à ce qu'ils disaient c'est pas c'est c'est et moi je *comprenais*
([Valibel > norHJ1r])
(朝、私たちにコーヒーか何かを持ってきてくれたんですよね、それで、その人たち

がバンで到着して私たちが彼らのそばにいたのを私はちゃんと覚えています。その人たちは最初話をしていて、パリ出身でとても教養のあるリーロンさんが私の横にいましたが、彼女は「何も理解できない」と言っていました。彼女は彼らが言っていることについて一言も理解していませんでしたが、私は理解していました。)

この例では « la madame *Lierond* comprenait pas un mot à ce qu'ils disaient » (「彼らが言っていることについて一言も理解していないリーロン」) と « moi je comprenais » (「理解している私」) が対比されており、moi という「強調」・「対立」などを示す強意的用法の代名詞が共起している。そのため (22) で説明したように、« moi je <u>pouvais</u> *comprendre* » のように認知動詞 comprendre に法動詞 pouvoir を付加することはできる。しかしながら、この無標の認知動詞 comprendre を「無標識可能」と捉えるか「理解状態」と捉えるかは発話者の真意に依拠するところがある。

結論と今後の展望

本稿では話し言葉の認知動詞 comprendre において可能標識が共起しやすい条件 (有標識可能表現) と可能標識が共起しにくい条件 (無標識可能表現) を分析した。

全般的に言えることとして、第一に法動詞 pouvoir による有標識可能表現は、基本的に意味効果 (「困難性」・「譲歩」が表出される文脈や修辞疑問、他の可能行為や人物との対比が行われる文脈) によって説明が可能である。第二に、無標識可能表現では vite や tout de suite、tout à l'heure、immédiatement といった瞬時性を表す副詞的表現が共起しやすい。法動詞 pouvoir のこの意味効果は Fuchs & Guimier (1989 : 6-7) が主張する「行為の達成以前に遡行して事行が観察される」というスキーマに還元されうる。すなわち法動詞 pouvoir は、認知動詞 comprendre が含意する到達動詞特有の行為過程 (プロセス) が前景化される際に共起しやすく、逆に瞬時性を表す副詞的表現が共起する場合はそのプロセスが捨象され、無標になりやすいと言える。

書き言葉と話し言葉における状況の違いについては、第一に、無標識可能と有標識可能の割合および各種可能標識の出現頻度に大きな差は観察されなかった。第二に、否定の頻度にも大きな差は観察されなかった。第三に、無標識可能・有標識可能ともに現在時制が過去時制を上回った。ただし、書き言葉では過去時制と現在時制の頻度には大きな差は見られない一方で、話し言葉では過去時制と現在時制の頻度に大きな差が見られることがわかった。これは、話し言葉において現在形をとる談話標識としての用法が多く使用される傾向にあるためであると考えられる。

そして書き言葉と同様に話し言葉においても、法動詞 pouvoir の共起を説明することができない事例や有標識可能表現の文脈と同じ状況にある無標識可能表現は一定数存在する。例えば次の発話では、無標識可能の認知動詞 comprendre を発した後に法動詞 pouvoir を一度入れ、その後に有標識可能の動詞 comprendre を発しているため、無標と有標の選択について発話者の迷いが観察できる。

(24) pas du tout oui j'adore le vin et le fromage tu as goûté ouais mais j'aime pas trop beau comment tu peux ne pas aimer le fromage moi je ne *comprends* pas cette euh je peux je peux pas *comprendre* le fromage c'est ma vie à moi je peux pas ne pas manger de fromage une fois par jour tu vois

[TUFS – Center of Usage-based Linguistic Informatics > 11DCFBC110913]

(うん、私はワインやチーズは大好きだけど、君がどうしてチーズを嫌いになれるのか私には理解できない。チーズは私にとって生活の一部だし、一日一回たりともチーズを食べずにはやっていけない。)

この例から考えられることは、無標と有標の選択は文法的な適性によるものではなく、到達動詞としてのアスペクトに関わる文脈に応じた傾向が出る問題であり、またそれぞれの例について個人的な判断の差があり、揺れのある問題であるということである。

本研究の問題点として、談話標識としての comprendre の発話を区別せずに数量的分析をおこなったということが挙げられる。しかし、動詞 comprendre の発話が談話標識か否かということを判別することは困難が伴うものである。

最後に本研究の新規性として、従来客観的に示されていなかった認知動詞 comprendre と法動詞 pouvoir の意味的適合性が KH Coder 3 による分析で明らかとなった。また、今回の KH Coder 3 による分析で認知動詞 comprendre が essayer (de inf.) や arriver (à inf.) といった動詞と共起しやすいということがわかり、到達動詞としての側面が浮き彫りになった。

参考文献

川村大 (2012)『ラル形述語文の研究』, くろしお出版.

楠本徹也 (2009)「無標可能表現に関する一考察」,『東京外国語大学論集』, 第 77 号, 65-85 頁.

工藤真由美 (1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト ——現代日本語の時間の表現』, ひつじ書房.

國末薫 (2021)「動詞 comprendre 意味と構文の記述的研究 ——フランス語話し言葉コーパスの分析から」,『ふらんぼー』, vol.46, 145-164 頁, 東京外国語大学フランス語学科研究室.

石一含 (2019)「日本語・中国語・英語の可能表現に関する対照研究 ——日本語の自動詞無標識可能表現から」,『地球社会統合科学研究』, 第 10 号, 9-23 頁, 九州大学大学院地球社会統合科学府.

高橋正 (2012)「モダリティ表現の日英語対照研究 (4) ——知覚動詞と CAN/COULD」,『英語英文学研究』, 第 36 巻, 第 2 号, 1-32 頁, 創価大学英文学会.

吉田永弘 (2019)『転換する日本語文法』, 和泉書院.

吉武大輝 (2022)「フランス語の認知動詞 comprendre における可能標識の共起をめぐって ——無標識可能と有標識可能に関する一考察」, 日本フランス語学会第 340 回例会発表資料.

Andersen, H.-L. (2007) Marqueurs discursifs propositionnels, *Langue française*, vol.154, pp.13-28,

Armand Colin.
Boissel, P. & Devarrieux, J. (1989) Paramètres énonciatifs et interprétations de *pouvoir*, *Langue française*, vol.84, pp.24-69, Armand Colin.
Charest, S. et al. (2012) *Le Grand Druide des cooccurrences*, Druide.
Fuchs, C. & Guimier, C. (1989) Introduction : la polysémie de « pouvoir », *Langue française*, vol.84, pp.4-8.
Kerbrat-Orecchioni, C. (2015) La négociation des (effets de) sens dans le dialogue, Carmen Pineira-Tresmontant (ed), *Discours et effets de sens*, Artois Presses Université, pp.53-70.
Le Querler, N. (1989) Quand *voir*, c'est *pouvoir voir*, *Langue française*, vol.84, pp.70-82, Armand Colin.
Le Querler, N. (2001) La place du verbe modal « pouvoir » dans une typologie des modalités, *Cahiers Chronos 8*, pp.17-32.
Vendler, Z. (1957) Verbs and Times, *The Philosophical Review*, vol.66, no.2, pp.143-160, Duke University Press.
Yoshitake, D. (2023a) La cooccurrence du verbe modal *pouvoir* avec le verbe de cognition *comprendre* en français moderne, *Bulletin d'Études de Linguistique Française*, vol.57, pp.21-31, Société Japonaise de Linguistique Française.
Yoshitake, D. (2023b) L'emploi de possible du verbe *arriver* en français : changement grammatical de la construction [N arrive à inf.] », *Flambeau*, vol.48, pp.138-155, 東京外国語大学フランス語学科研究室.

参考資料 (KH Coder 3 ならびに ORFÉO)

KH Coder 3
(https://khcoder.net/).
ORFÉO (Outils et Recherches sur le Français Écrit et Oral)
(https://repository.ortolang.fr/api/content/cefc-orfeo/11/documentation/site-orfeo/index.html)
Benzitoun C., Debaisieux, J-M., Deulofeu, J. Le projet ORFÉO : un corpus d'étude pour le français contemporain, *Corpus 15*, Actes du colloque Corpus de Français Parlés et Français Parlés des Corpus.